

報道関係者 各位

2023 年 8 月 28 日

パコパンパ遺跡における墓の発見

国立民族学博物館(大阪府吹田市千里万博公園 10-1)では、国立サン・マルコス大学(ペルー)と、考古学分野における共同研究員調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流の促進を目的として、学術交流協定を締結しております。この度、本協定に基づき実施しているペルー北部パコパンパ遺跡での発掘調査において、下記の発見がありましたので、お知らせします。

◆概 略

国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団は、2023 年 8 月 25 日、ペルー北高地パコパンパ考古遺跡複合内のカピーヤ遺跡において直径約 3m、深さ約 1m の土壙墓を発見した。被葬者は 1 名、紀元前 1000 年頃の宗教的指導者と考えられる。右半身を上側に、上半身は進展状態、下半身は屈曲状態で発見された。被葬者の頭部付近には、土器が 2 点認められた。土壙墓は埋土中には、刻線で飾られた完形土器のほか、アンデスでは珍しい印章が 3 点も副葬品として捧げられていたことから、有力な宗教的指導者であったと考えられる。被葬者の性別や年齢は、今後、分析する予定である。

この墓は、同遺跡で同調査団が発見した「パコパンパの貴婦人」墓(2009 年)、「ヘビ・ジャガー神官の墓」(2015 年)よりも 200 年～300 年も前の墓であり、宗教的指導者が、かなり早くから誕生していたことを示している。また昨年発見し、世界的に報道された「巻貝の神官墓」よりは 200 年ほど新しいと思われるが、その時期の墓は、これまでほとんど発見されておらず、しかもリーダーと思われる人物の埋葬は大変珍しく、貴重である。

◆調査チーム: 国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団

◆調査リーダー: 関雄二・国立民族学博物館名誉教授・特定教授

◆発掘責任者: フアン・パブロ・ビジャヌエバ ペルー国立サン・マルコス大専任講師

◆資金: 日本学術振興会 科学研究費補助金(基盤 A)「社会的記憶の観点からみたアンデス文明史の再構築」(代表 関雄二)

◆遺跡の位置: ペルー北高地カハマルカ州チョタ郡 海拔 2500 メートル

◆遺跡の年代: パコパンパⅠ期 紀元前 1200 年～紀元前 700 年

パコパンパⅡ期 紀元前 700 年～紀元前 400 年

◆編 年

Ⅰ期もⅡ期もアンデス考古学上、形成期と呼ばれる時代に属する。紀元前 2500 年～西暦紀元前後がこれにあたる。神殿における祭祀活動を中心に社会統合が図られていた時代。ほぼ同時代の遺跡としては、世界遺産に指定されているチャビン・デ・ワンタル遺跡や、かつて日本調査団(団長: 大貫良夫東大名誉教授)が発掘し、金製品を伴う墓を複数発見したクントウル・ワシ遺跡がある。

◆遺跡の特徴

日本・ペルー合同調査団は、2005 年以来、ペルー北高地最大のパコパンパ遺跡と呼ばれる形成期神殿を発掘調査してきた。この遺跡では、緩やかに連なる自然の尾根を利用した約 4 ヘクタールの範囲に三段のテラスが築かれ、最上段に遺構が集中する。一方で、この遺跡の周辺には、複数の関連遺跡が存在し、およそ 16 ヘクタールの全体をパコパンパ考古遺跡複合と呼んできた。今年の発掘(7 月 25 日～9 月 3 日)は、こうした関

連遺跡の一つであるラ・カピーヤで行われている。ラ・カピーヤ遺跡は、パコパンパ遺跡の東側、およそ 600m 離れた場所にあり、これまで 2015 年、2019 年、2021 年に発掘を実施してきた。そこではパコパンパⅠ期にあたる擁壁(基壇を支える壁)などを発見している。

ラ・カピーヤ遺跡の建築の全体像はいまだに不明だが、パコパンパ遺跡では、中央神殿からのびる建築上の軸を中心に左右対称に建物を配置していたことがわかっており、その中心軸を東側に伸ばした場所にラ・カピーヤ遺跡が存在する(添付図参照)。その意味で、紀元前 1000 年頃には、遺跡複合全体を計画的に整備した大神殿複合が完成していたことは確実である。

◆墓と副葬品の位置

ラ・カピーヤ遺跡では、パコパンパ遺跡と同じⅠ期(紀元前 1200 年から 700 年頃)の建築が発見されてきた。昨年の調査では、大基壇上に築かれた小基壇とそれに隣接する小部屋が発見されている。この小部屋から小基壇を上る階段を上りきった床面に墓(巻貝の神官墓)が設けられていた。その後の年代測定の結果、紀元前 1400 年から 1200 年にさかのぼる大変古い墓であることがわかった。本年度は、「巻貝の神官墓」付近を発掘し、それと関連した活動の証拠を得ることを目標の一つに据えた。

調査の結果は、「巻貝の神官墓」よりも後の時代に、「巻貝の神官墓」に関連する施設を大きく破壊した上で、別の墓を設けたことが明らかになった。今年、発見した墓がそれにあたる。

墓抗の切り口は円形を呈し、直径は約 3m である。深さは約 1m の土壇墓である。深さ 90cm まで、大量の灰と黒色土が詰まっており、覆土中からは、印章(スタンプ)や刻線文様の完形土器などの副葬品が出土した。ことにスタンプは 3 つも出土しており、しかも円筒形のものから、ジャガーの顔や手形をモチーフにしたスタンプ型など、アンデス文明では大変珍しい出土例といえる。こうした点からも、被葬者は重要な人物であることが推測される。

被葬者の年齢や性別はこれから分析を行う予定だが、南北方向に身体を軸を保ち、うつぶせで、足をクロスさせる半伸展葬状態で見つかった。屈葬が多い、形成期の埋葬の中では大変珍しい事例である。

被葬者に近い場所から出土した副葬品としては、頭部近くでの文様付き開口鉢、また被葬者の西側で発見された 2 個の内湾小鉢と骨製留めピンが目立つ。今後の発掘次第では、副葬品が増える可能性が高い。

◆被葬者の情報

今後は、本プロジェクトの自然人類学担当の長岡朋人青森公立大学教授による分析が行われる予定であり、性別と年齢は、現段階では不明である。

◆意義

アンデス文明初期の社会は、一般に、国家や王国が存在する前の比較的平等的な社会と考えられているが、これまで日本調査団が手がけたクントゥル・ワシ遺跡の結果などを考慮すると、形成期の後半(紀元前 800 年～700 年)には、神殿で執り行う儀礼など宗教面をつかさどる集団(指導者)が次第に権力を掌握していったと考えられている。パコパンパ遺跡でも、例外ではなく、Ⅱ期(紀元前 700 年～400 年)に入るとこの傾向が顕著になると考えられてきた。「パコパンパの貴婦人の墓」(2009 年)や「ヘビ・ジャガー神官の墓」(2015 年)もその証拠としてとりあげることができる。それらの墓では、金製品の副葬、施朱の他、被葬者には頭蓋変形が認められた。頭蓋変形は、生後まもなく施すことで頭蓋を変形させることから、生まれながらにしてリーダーとなる運命にあった人物が誕生していたことを物語っている。

一方で、それ以前のⅠ期の時代には、ほとんど墓が見つかっていなかった。パコパンパを含めた周辺の景観を大々的に改変し、数多くの建物を計画的に建てた時代ながら、Ⅱ期のようなリーダーの存在をうかがわせる証拠は極めて乏しかった。今回の墓のように、大型の土壇墓に特殊な副葬品を収めた事例は、「巻貝の神官墓」を除けば、初めてであり、Ⅰ期、いわゆる形成期中期に遡る時期に、宗教的指導者の存在が明らかになった意義は大きい。「巻貝の神官墓」は、副葬品としての土器を伴っておらず、また年代もかなり古いため、これまでの研究成果と関連付けることが難しい状況にあるが、今回の墓の場合は、共伴する土器などから、パコパンパ遺跡で建築活動が最盛期を迎えるⅠ期の墓であることが確実である。繰り返すが、アンデス文明において、これまで権力者の確実な登場を紀元前 800 年頃としてきた点を 200 年から 300 年近く遡らせることになった点は

注目に値する。

なおパコパンパ村では、観光ビジターセンターの建設が、ペルー国政府観光省によって推進されることが発表されている。パコパンパ村民のみならず、本調査団ならびにカハマルカ州政府の努力によって実現されつつある。

◆問い合わせ

調査リーダー：関雄二・国立民族学博物館名誉教授・特定教授

※連絡先は国立民族学博物館 総務課 広報・IR 係までお問い合わせください。



©パコパンパ考古学調査団

[プレスリリースお問い合わせ] 国立民族学博物館 総務課 広報・IR 係
電話:06-6878-8560(直通) 平日 9:00~17:00 Fax:06-6875-0401 Mail: koho@minpaku.ac.jp
プレス向けウェブサイト www.minpaku.ac.jp/press